

日韓文化交流基金 NEWS

The Japan-Korea Cultural Foundation

Contents

- 1 第14回日韓文化交流基金賞
- 2 基金賞受賞者エッセイ 海峡を越えて歌う
声楽家、ソプラノ歌手 田月仙
- 3 第29回日韓文化交流基金韓国訪問団
- 4-5 青少年交流 「日韓交流ユースカップ2013」
- 6-7 青少年交流 ホームステイ体験
「日韓交流おまつり2013 in Seoul」
- 8-9 講演会 韓国映画の源流
講師：四方田犬彦
- 10 助成事業紹介
小学生と先生による日韓ソバメ観察ワークショップ
特定非営利活動法人 バードリサーチ 神山和夫
- 11 日韓文化交流基金事業報告
(2013年7月～9月)
- 12 日韓文化交流基金創立30周年記念事業

第14回日韓文化交流基金賞

日韓文化交流基金では、学術・文化分野の交流を通じて日韓両国間の友好親善に寄与した韓国人の功績をたたえるため、1999年に「日韓文化交流基金賞」を創設し、毎年3名(団体)を表彰しています。

本年は当基金の創立30周年を記念し、下記の3名と1団体を表彰しました。授賞式は日韓文化交流基金韓国訪問団の訪韓期間中、9月25日に、ソウルロッテホテルで開催しました。



受賞者プロフィール

韓美卿 (ハン・ミギョン)

1948年生まれ
韓国外国語大学校日本語学教授

長年にわたり、韓国の日本語学、日本語教育学界を牽引して来られました。2013年6月には、日韓の研究者計百名による研究叢書「日本語学と日本語教育」(全7巻)を刊行するなど、韓国内の日本語学研究ならびに研究者の育成に多大な功績を残されています。



田月仙 (チョン・ウォルソン)

1957年生まれ
声楽家、ソプラノ歌手

東京生まれの在日コリアン二世として、1998年には、東京・ソウル間の友好10周年を記念して韓国で初めて公式に日本語の歌を独唱しました。サッカーワールドカップ日韓共同開催記念オペラ「春香伝」の両国内での公演など、日韓間の節目となるイベントに数多く関与し、両国関係の深化に大きく貢献されています。



柳在順 (ユ・ジェスン)

1958年生まれ
インターネット新聞「JPニュース」「KRニュース」代表

90年代から日韓両国を往復しつつ日本関連の記事を韓国の大手メディアに寄稿し、韓国における現代日本理解の増進に大いに寄与されました。その後、日韓両国関連の情報をそれぞれ日本語、韓国語で幅広く紹介するインターネット新聞「JPニュース」「KRニュース」を運営し、両国の相互理解増進に貢献されています。



一徒初等学校 (イルト小学校)

1968年開校
(代表：高雲進校長)

韓国初の試みとして2009年に全校児童を対象として日本語の授業を導入し、教材の開発、教師の確保等、継続的な日本語教育実施のために地道な努力を続けて来られました。多彩な日本文化紹介事業を実施する等、日本語のみならず、日本文化も含めた日本理解の増進のために尽力されています。



授賞式にて。

歌手生活30周年を迎えた今年、私は第14回日韓文化交流基金賞受賞という栄誉を賜り、受賞式に参加するため羽田からソウル行きの飛行機に乗った。

ソウルのロッテホテルで行われた授賞式で、両国のご関係者様が見守る中、万感の思いを込めてふたつの故郷の歌を歌った。朝鮮半島出身の両親のもと、日本で生まれ育った私にとって、子供の頃から日本の歌はふるさとの歌であり、朝鮮半島の歌はまだ見ぬもうひとつの故郷の歌であった。ふたつの故郷の歌は私を育み、過去と未来を繋ぐ夢ともなっていた。

日本と韓国の狭間で……

日韓文化交流基金が設立された同じ年の1983年。私は東京にてソプラノ歌手としてデビューを果たした。日本ではまだ韓国人音楽家がほとんどみられず、芸能界では多くのコリアンが日本名を使っていた。そんな中、私は田月仙（チョン・ウォルソン）という本名を使い、最初のリサイタルの時から世界の歌に交えて韓国の歌を日本に紹介してきた。85年にはピョンヤン、1994年にはソウルで公演し初の南北コリア両公演も実現した。

1998年、東京とソウルの姉妹都市提携10周年記念行事に、東京都親善大使として私に両首都で日本と韓国の歌を歌ってほしいという依頼が来た。韓国ソウルで初めて公式に日本の歌を歌うことになったのだ。日韓両方を故郷と考えている私にとって、願ってもない申し出だった。韓国の歌は「アリラン」「懐かしい金剛山」などを選び、日本の歌は「赤とんぼ」「浜千鳥」「夜明けのうた」を選んだ。東京国際フォーラムで東京公演を行い、翌日ソウルに到着した。ところが韓国のテレビや新聞で『夜明けのうた』は、日本の「大衆歌謡」なので歌うことは許可されないと報道されていた。当時、韓国では日本の大衆歌謡を公の場所で歌うことは禁止されていた。しかし就任したばかりの金大中大統領は、段階的開放を決定した。まさに黎明期だった。

私が「夜明けのうた」にこだわったのも、日韓の新しい夜明けを歓迎したいという気持ちがあったからだ。結果、私は「夜明けのうた」を日本語の歌詞をつけずにメロディーのみで歌った。歌い終えて舞台を降りると涙が溢れた。歌さえも共有できないことが、悲しかった。



2002年、私は日本の総理官邸内の特設ステージに立っていた。ワールドカップ共催のため来日した大韓民国大統領を歓迎する特別公演の舞台だった。正面に日本の首相と韓国の大統領が並んで座っていて私の歌声を待っていた。私は喜びに胸をふるわせながらふたつの故郷の歌「アリラン」と「ふるさと」そしてオリジナル曲「海を越えて」を歌った。

日韓の架け橋として。

今年、私は日本で歌手生活30周年を迎えた。その間、ヨーロッパでのオペラ主演や日韓両国でのオペラ「春香伝」主演など海峡を越えて歌い続けた。30周年に併せ今年1月にはNHKで特集が組まれ、4月には、韓国KBSスペシャルで「海峡のアリア 田月仙30年の記録」という特別番組も放送された。そして30周年記念リサイタル「歌に生き愛に生き」が大阪・東京にて開催された。その最中に日韓文化交流基金賞受賞の知らせが届いたのだ。一緒にこの日を迎えてほしかった両親をはじめ、どんな時も見守って下さった日本の恩師もすでにこの世を去ってしまった。言葉では言い尽くせぬ思いを抱いて私はその日を迎え、そして心からの感謝を込めてふたたび舞台へと向かった。

デビュー30周年を迎えて。

私が今日まで歌い続けることが出来たのは、かつて朝鮮半島から15才の時に戦争のため学徒勤労動員で連れてこられた父と、廃品回収をしながら私を育ててくれた母をはじめ、数多くの在日一世の生き様をこの目でみてきたからである。また、朝鮮半島の南北分断の陰で、国土だけではなく、人々の心も、歌さえも引き裂かれてきた現実をこの目でみて来たからにほかならない。そして、さまざまな壁に突き当たったとき、人知れず私を励まし、支えてくださった心ある日本人の存在があったからである。

私は二つの陸地の間にある海が人々を引き裂くのではなく、つなげる道になることを祈っている。そして人々の心に、私の心に、いつの日か、本当の平和が訪れることを願いながら、歌い続けた。海峡を越えて……。

声楽家、ソプラノ歌手

チョンウォルソン

田月仙

東京生まれ。世界各国でオペラやコンサートに出演。初の南北コリア公演を実現し、韓国ソウルで初めて公式に日本の歌を歌う。W杯日韓共催記念オペラ「春香伝」日韓両国にて主演。日本国総理大臣主催韓国大統領歓迎公演で独唱。NHK「海峡を越えた歌姫」、KBS「海峡のアリア 田月仙30年の記録」が全国放送。

著書に「海峡のアリア」（小学館）、「禁じられた歌」（中央公論）など。第14回日韓文化交流基金賞受賞。二期会会員。

※田月仙さんには、日韓文化交流基金講演会（「K-POPの源流」、2014年3月28日、於日韓文化交流基金会議室）でお話いただきます。

PROFILE

第29回日韓文化交流基金韓国訪問団

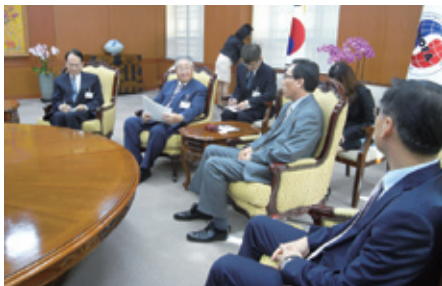
当基金の役員からなる「日韓文化交流基金韓国訪問団」が9月25日から28日までの4日間、ソウルと光州市、全羅南道(木浦市、珍島)を訪問し、韓日文化交流基金をはじめとする関係団体や要人への表敬訪問、フェロシップ経験者との懇談や文化施設の見学などを行いました。

日韓文化交流基金の韓国訪問団は、1984年に、当時の花村仁八郎副会長(当時:後に第2代会長、1997年1月逝去)のイニシアティブにより始まったものです。花村会長は、「日韓文化交流は我が天命なり」という信念のもと、日韓の次世代の相互理解を深めるための青少年交流、学術文化交流の重要性を常々強調し、基金の運営にあたるもの自らが文化交流の重要性を、身をもって感じることを目的として、訪韓団をスタートさせました。以後、韓国訪問団は、毎回韓国国内の関係機関、団体を訪問して、両国間の交流のあり方について意見を交換し、また韓国全土の文化施設を見学しつつ韓国文化に対する理解を深めてきました。1999年からは訪韓期間中に「日韓文化交流基金賞」の表彰式を行っています。

9月25日 (水)	ソウル到着 別所浩郎駐韓国大使表敬訪問 趙兌烈外交部第2次官表敬訪問 鯨島団長主催レセプション/第14回「日韓文化交流基金賞」授賞式
9月26日 (木)	ソウルジャパンプラブ役員との朝食懇談会 趙顕宰文化体育観光部第1次官表敬訪問 訪日・訪韓フェローとの昼食懇談会 大韓民国歴史博物館見学 李洪九韓日文化交流基金会長主催歓迎晩餐会
9月27日 (金)	光州市内所在大学日本語日文学科教員との懇談会 錦湖高等学校訪問 光州日報社訪問 姜雲太光州広域市長表敬訪問 木浦共生園関係者との懇談晩餐会
9月28日 (土)	珍島見学 帰国

<参加者>

団 長	鯨島 章男	当基金会長、太平洋セメント(株)名誉顧問
副団長	小野 正昭	当基金理事長、海外邦人安全協会会長
顧 問	戸塚 進也	当基金常任理事、元蒲川市長、元衆議院議員
顧 問	小山 敬次郎	当基金監事、東京経済大学理事
団 員	樫崎 正博	当基金理事、元関電産業(株)相談役
団 員	大竹 洋子	当基金評議員、東京国際女性映画祭実行委員
団 員	伊藤 亜人	当基金評議員、東京大学名誉教授
団 員	余田 幸夫	当基金業務執行理事・事務局長



趙兌烈外交部第2次官表敬

9月に東京とソウルで開かれた「日韓交流おまつり」や、両国でそれぞれ2018、2020年に開催される平昌(ピョンチャン)冬季オリンピック・パラリンピック(2018)と東京夏季オリンピック・パラリンピック(2020)を契機としたスポーツ交流の拡大の可能性等について懇談しました。



錦湖高校(光州市)訪問

基金が主催する日韓両国高校生のサッカーを通じた交流事業「日韓交流ユースカップ」に、2010年から毎年生徒を派遣している錦湖高校を訪問、校長、教頭先生と新たな交流の方向性について懇談し、サッカー部の選手のみなさんを激励しました。



珍島見学

伊藤亜人評議員が長年にわたり研究の対象として来られた珍島を見学しました。同評議員が1972年から現地調査のたび滞りされていた民家も訪問し、現地の方々から現在の島の様子についてお話をうかがいました。

韓日文化交流基金訪日団

日韓文化交流基金の韓国国内のカウンターパートである韓日文化交流基金(会長:李洪九元国務総理)の役員及び関係者一行が10月25日から28日までの4日間訪日し、初日の25日には、当基金鯨島会長の主催による歓迎晩餐会を開催しました。翌26日、一行は当基金の会議室で、日本の各界の有識者の方々と共に「VISION2045 - 知識人対話」と題する懇談会を開催し、日本と韓国が新たな歩み始めてから百年となる2045年を見据えての日韓関係のあり方等について意見の交換を行いました。

<参加者>

李洪九 (韓日文化交流基金 会長、元国務総理)	柳明桓 (元外交通商部 長官)
孔魯明 (元外務部 長官)	裴仁俊 (東亜日報 主筆)
李相禹 (韓日文化交流基金 理事長、新アジア研究所所長)	金秀雄 (韓日文化交流基金 常任理事)
柳根一 (元朝鮮日報 主筆)	



韓日文化交流基金歓迎晩餐会

「日韓交流ユースカップ 2013」 ～ Cool Japan & Hot Korea ～

2013年7月24日(水)から8月9日(金)まで、外務省が推進する「JENESYS2.0」の一環として、「日韓交流ユースカップ2013」を実施しました。

この事業は、日韓の高校同士が日韓混成チームを結成し、お互いの国を訪問しながら、サッカーを通じた交流を行うものです。5回目の開催となる今年は、8つのチームが参加、相手国の文化や社会に触れる交流を通じてお互いの魅力を発見し相互理解を深めました。8月6日(火)から8日(木)には事業を締めくくる集合行事が開催され、日韓混成の8チームが交流の成果を発表するプレゼンテーション・コンテストおよびサッカー大会で順位を競った結果、習志野市立習志野高等学校・仁川南高等学校チームが総合優勝に輝きました。

■参加チーム(8チーム)

- (1) 東北学院高等学校・錦湖高等学校
- (2) 栃木県立宇都宮白楊高等学校・崇実高等学校
- (3) 國學院大學栃木高等学校・尚文高等学校
- (4) 矢板中央高等学校・高陽高等学校
- (5) 鹿島学園高等学校・九里高等学校
- (6) 習志野市立習志野高等学校・仁川南高等学校
- (7) 東京学館高等学校・富平高等学校
- (8) 山梨県立甲府東高等学校・忠州商業高等学校

■日程

(1)派遣事業

7月24日(水)～7月30日(火)：韓国国内(各交流先地域)

(2)招へい事業

8月2日(金)～8月9日(金)：日本国内(各地域及び栃木県宇都宮市)うち、集合

行事日程

- ・プレゼンテーション・コンテスト(8月6日)
会場：宇都宮グランドホテル1階「平安の間」
- ・サッカー大会(8月7日・8日)
会場：栃木SC宇都宮フィールド
- ・表彰式(8月8日)
会場：宇都宮グランドホテル1階「平安の間」



サッカー大会の組み合わせ抽選会

韓国での交流(日本側高校生の派遣事業)

7月下旬、日本側の高校生が韓国の交流相手チームを訪問し、5～7日間の日程でホームステイまたは合同合宿をしながら、サッカー練習や試合、文化体験などを行いました。招へい事業に先立ち、日本側生徒が自分たちの地元をアピールする機会も設けられ、観光地や特産品、名物料理などの魅力が伝えられると、韓国側生徒は訪日への期待に胸をふくらませていました。



日本の魅力をアピール(派遣事業)

日本での交流(韓国側高校生の招へい事業)

8月初旬からは日本側チームが韓国の交流チームを迎え、招へい事業を開始しました。韓国側は日本側交流校の各地元において学校訪問などの交流やサッカー試合を通じて、派遣事業よりさらに親交を深めた後、6日(火)に全8チームが栃木県宇都宮市に集合しました。

● 集合行事(プレゼンテーション・コンテスト、サッカー大会、表彰式)

8月6日(火)～8日(木)にかけて、これまでの交流の成果を発表するプレゼンテーション・コンテストとサッカー大会に臨みました。

プレゼンテーションのテーマは「お互いの魅力発見」。派遣・招へい事業でさまざまな交流をした成果に加え、お互いに感じた魅力やどれだけ相互理解を深められたかをチーム別に発表しました。相手国で体験したことを「Hot KoreaとCool Japan」と特徴づけたり、ホームステイや合宿での生活体験が披露されるなど、直接行き来して交流することで感じた魅力を高校生の視点から語っていました。



さまざまな視点からの魅力がチーム別に発表された

主催：公益財団法人 日韓文化交流基金
後援：外務省、公益社団法人 栃木県サッカー協会

7日(水)からは、栃木SC宇都宮フィールドに場所を移し、日韓の混成チーム同士によるサッカーのトーナメント戦が行われました。翌8日(木)には2日間の試合を勝ち抜いた矢板中央高等学校・高陽高等学校チーム対習志野市立習志野高等学校・仁川南高等学校チームによる決勝戦となり、圧倒的な強さをみせた習志野市立習志野高等学校・仁川南高等学校チームが勝利を収めました。

大会中には並行して、1日目に企業訪問、2日目にはサッカークリニックも実施しました。スポーツ用品を扱う大手販売店を訪れた一行は、店長から日本における販売店網や商品展開などの説明を受け、スポーツ用品のみならずキャンプ用品まで取り扱う品揃えとプライベートブランドの豊富さに興味を感じていました。翌日はサッカー元日本代表で栃木県出身の米山篤志・東京23フットボールクラブ監督がコーチを務めるサッカークリニックを開催し、ユニークなパス練習など、コミュニケーションを深めるトレーニングを行いました。「日韓両国の選手も今や世界中でプレーし、外国選手とのコミュニケーションは非常に重要。このような行事の貴重な機会を通して多くのことを学んでほしい」と米山監督からアドバイスを受けると、両国の選手らは、言葉が通じない中でも楽しみながら意思疎通を図る工夫とその大切さを実感していました。

プレゼンテーション・コンテストと2日間にわたるサッカー大会の結果、総合優勝はプレゼンテーション・コンテスト、サッカー大会とも最高得点を獲得した習志野市立習志野高等学校・仁川南高等学校チームに決定し、表彰式にて当基金の鮫島章男会長から優勝トロフィーが贈呈されました。また、参加全チームに岸田文雄外務大臣からの賞状が授与されました。



やはりサッカー選手、豊富な品揃えに興味津々(企業訪問)



ボール渡しのチーム対抗戦(サッカークリニック)



今後の末長い交流を祈り、ボールにメッセージを記す

■総合順位結果

順位	総合点	チーム名	プレゼンテーション	サッカー
1位	100	習志野市立習志野高等学校・仁川南高等学校	1位	1位
2位	79	東北学院高等学校・錦湖高等学校	2位	3位
3位	77	矢板中央高等学校・高陽高等学校	4位	2位
4位	71	國學院大學栃木高等学校・尚文高等学校	2位	4位
5位	53	鹿島学園高等学校・九里高等学校	4位	5位
6位	29	栃木県立宇都宮白楊高等学校・崇実高等学校	4位	8位
7位	25	東京学館高等学校・富平高等学校	8位	6位
8位	22	山梨県立甲府東高等学校・忠州商業高等学校	7位	7位



堂々の総合優勝(習志野市立習志野高校・仁川南高校チーム)

■交流を通して感じた魅力

日本側参加者(韓国の魅力)	韓国側参加者(日本の魅力)
<ul style="list-style-type: none"> ・以前は冷たい印象で警戒していたが、今(交流後)はとても親密に感じている。 ・ニュースでは対立している両国というイメージだったが、笑顔での歓迎に親近感を持った。 ・初対面でも親切に接してくれる。 ・明るく社交的でスキンシップが多い。 ・積極的で常に前向きである。 ・食事がおいしく、野菜が多くて健康や栄養に気を遣っている。 	<ul style="list-style-type: none"> ・街のきれいさ、人も交通もマナーが良い。 ・礼儀正しくきちんと挨拶をする。 ・失敗をしても笑顔で激励してくれる。 ・皆仲が良く、団結している。 ・学校で多様な部活に取り組んでいる。 ・負けている試合でも、前向きに最後まで走り続ける懸命さ。 ・観光地の温泉の種類が多くて楽しめる。 ・ラーメンがインスタントでなく、手打ちで具もおいしい。

ホームステイ体験

ホームステイ体験は、青少年交流事業の重要な交流の場となっています。一例として、在韓公館選抜事業 韓国青年訪日研修団(平成25年7月30日(火)～8月8日(木))が訪れた広島県・安芸太田町でのホームステイの様子を体験談とともにご紹介します。



団体写真(安芸太田町)

ホームステイ

● 民泊受入の想い：安芸太田町観光協会 常務理事兼事務局長 吉田秀政

これまで町民は「ヒト」を呼ぶ事が出来るのは「山・溪谷・湖」などの観光地だけで、外から人が来ても自分達にはなんのメリットも影響もないと思っていました。

しかし、この度の「民泊」は町民を変えました。何より「自分たちの普段通りの生き方」が、誰かの共感を呼び、誰かに感動をもたらす事ができると考えるようになり、やがて実感となりました。

国際関係でもっとも怖いのは「お互いの本当の姿を知らない」ことに他なりません。利害がまったく一致している国などありません

し、大切なのは理解し、尊重した上で主張すべき事だと考えております。

民泊を通じた様々な方との交流は、たとえ過疎地にいたとしても、町民一人一人が「真のグローバル目線」を持てる機会となります。そしてその意識は海外の方を招く心となります。

今回の韓国の学生との感動的な交流体験を機に、世界中に娘や息子、あるいは孫ができる夢を抱いた町民の想いを遂げるべく、今後も取り組んでいきたいと思っています。

● 韓国の大学生を受け入れて：小田 理恵

我が家には4人の女子大学生が来ました。一度に大家族になったようで、誇らしい、嬉しい気持ちになりました。

学生たちは、日本の生活文化を理解しようとするいろいろなことに対して、質問してくれました。また、誰に対しても、丁寧に心遣いをしている様子を、思いやりをもって育てられたのだと、韓国のご両親・ご家族について、思いを馳せました。

正直なところ、受入をする前は、「韓国」という国に関心をあまり持っていませんでした。学生との出会いを通し、彼女たちがどんな町で暮らしているのか、大変興味が湧きました。近所の中学生・

小学生も一緒に花火などをして過ごし、韓国の人、文化に興味津々な様子でした。夏休みの貴重な体験、子供たちにも有意義であったと思います。

将来、学生たちを韓国に訪ねたいと思っています。そして、学生たちが、ホームステイでどんなことを感じてくれたのか、改めて、話をしてみたいと考えています。

国は違えども、人と人で、直に会って過ごしてみれば、案外に素直に相互理解を深められると感じられた、ホームステイの体験でした。

● ホームステイで学んだこと：公州錦城女子高等学校3年 チョン・ジンギョン 丁珍景

私は龍山浩司さんのお宅にお世話になり、茶道体験・温井ダム観光・花火・日本料理体験などの様々な活動を経験しました。ホームステイの中では、流しそうめん体験が一番思い出に残っています。みんなで楽しみながら流しそうめんをして、日本の家族たちと絆を育むことができました。龍山さんの指にバンソウコウが貼ってあるのを見て、単なる流しそうめんではなく特別な思い出になりました。流しそうめんを流す竹を割る際に怪我をされたのではないかと思ったからです。それで、単純な「食べ物」でなく、温かい人情を感じるものとして、もっと印象が強くなりました。

「一期一会」。私が今回の研修を通じて学んだ日本の美しい言葉です。ホームステイ体験は、お世話になった一つの家だけにとどまらない、その国の文化を存分に感じることでできる体験です。ホームステイにより、私は日本人の深い人情と、文化を感じ

ることができました。帰国して数か月たった今でもホームステイの思い出を思い返すと幸せな気持ちになります。「一期一会」の機会を与えて下さった関係者の方々、我々研修団を温かく迎えて



ホストファミリーと(一番右が著者)

くれた安芸太田町の住民の方にも、あらためて感謝の意をお伝えしたいです。機会があれば韓国にもご招待し、これからもご縁をつないでいきたいです。ありがとうございます。

「日韓交流おまつり 2013 in Seoul」

当基金では「日韓交流おまつり2013 in Seoul」に関し、出演団体を支援し、ミス日本を派遣しました。さらに、当基金派遣の日本大学生訪韓団は「JENESYS2.0」ブースを運営しました。

9月15日(日)にソウルにあるCOEXで行われた「日韓交流おまつり2013 in Seoul(以下「おまつり」)」にJENESYS2.0の一環として、当基金は出演団体支援及び、日本の大学生によるブース出展を行いました。

● 出演団体支援

「おまつり」に出演が決定している団体を対象に、当基金から出演にかかる費用の支援を以下の3団体に行いました。



沖縄市山里青年会／山里エイサー
山里青年会のステージでは、満席の観客を前に、約30名による力強い男エイサーが披露されました。太鼓と三線、合間に入れられる息の合ったたくましい囃子言葉でエイサーの魅力をつつぱりと伝えていました。



**皇學館大学雅楽部／
雅楽の演奏及び舞楽「蘭陵王」**
皇學館大学雅楽部のステージでは、雅楽の演奏に合わせて、舞人がステージの中心で舞を披露すると、その優雅な音と動きに観客も興味深く見入っていました。



**甲斐◇風林火山／
よさこい鳴子踊り**
甲斐◇風林火山は、演舞者全員女性による、しなやかで躍動的な踊りで観客を魅了していました。

● ミス日本派遣

2013年度ミス日本グランプリの鈴木恵梨佳さんを「おまつり」に派遣し、ステージ出演及び来場者との写真撮影会を行いました。ステージ出演では、鈴木さんがこの日のために練習した韓国語で自己紹介をすると、観客から温かな拍手が沸き起こりました。また、来場者との記念撮影では長蛇の列ができるほどの人気ぶり、鈴木さんは終始にこやかに握手や撮影に応じていました。



● 日本大学生の参加

9月9日から18日まで韓国外交部の招へいで当基金より派遣していた、日本の大学生も「おまつり」に参加し、「JENESYS2.0」ブースの運営及びボランティアを行いました。大学生の韓国人ボランティアに手伝ってもらいながら、来場者に給手紙の作り方を教えたり、日本の各地方に関するクイズを出したりしました。クイズが一番人気が高く、来場者は頭をひねらせながら回答していました。また、韓国の大学生ボランティアと協力して、おまつりのチラシを配る等のボランティアも行いました。



最後はサムルノリのキム・ドクスさんの音頭で出演者、来場者全員が輪になって踊りながら、フィナーレを迎えました。

「おまつり」の参加者たちは、言葉が通じなくても踊りや歌で人と人の心がつながることを感じていました。



「日韓交流おまつり 2013 in Tokyo」

「日韓交流おまつり2013 in Seoul」に続き、9月21日(土)～22日(日)に「日韓交流おまつり2013 in Tokyo」が晴天のもと日比谷公園(東京・千代田区)で開催されました。開会セレモニーには安倍晋三総理夫人の昭恵さん、高円宮妃久子さま、岸田文雄外相ら出席し、盛大に行われました。当基金からは鮫島章男会長、小野正昭理事長が参席しました。

テーマ企画「源流シリーズ」第一弾として、映画と文学を中心に批評活動を続けておられる四方田犬彦講師をお招きし、「韓国映画の源流」についてお話をうかがいました。〔2013年10月1日(火)日韓文化交流基金会議室〕

韓国を席卷した『金色夜叉』

本日はまず、皆さんに説明抜きで韓国映画『長恨夢(チャンハンモン)』の一部をご覧くださいましたが、似たようなものを観たことがあると思われた方も多いのではないのでしょうか。このフィルムは尾崎紅葉の『金色夜叉』(1897-1902まで読売新聞に連載・未完)を1964年に韓国で映画化したものです。実は2度目の映画化ですが、この作品は韓国で大ヒットしました。日本に少し遅れて韓国も映画が大衆娯楽の王様だった時代がありました。それが60年代の前半です。その映画産業の絶頂期に撮られたのがこの作品です。観客のほとんどはすでにこの話を知っていました。その上で、「ああ、あの物語が映画になったんだ、じゃあ観に行こう!」ということで観に行ったんですね。

ではどうしてこういう映画が作られ、大ヒットしたのでしょうか。朝鮮半島は1945年に太平洋戦争が終結し、日本統治が終わった後、朝鮮戦争を経て国家が北と南に分断されました。その間、日本色追放政策のもと、日本的なものを徹底的に排除してきました。ところが日帝時代に入ってきた新派は解放後も禁止できず、そのまま受け継がれてきたのです。

新派というのは、元々明治時代に当時の日本人の感情を描くために始まりました。それまでは歌舞伎がありましたが、近代明治の人々の感情を描くには歌舞伎では不十分だということで、歌舞伎を改良して新派が始まったのです。泉鏡花、尾崎紅葉ら、主に硯友社に参加した作家の小説を舞台にすることから始まりました。『滝の白糸』、『婦系図』などが舞台になって、そこから原作にはない名場面が作られるといった具合に、変化していきました。

『金色夜叉』は韓国では1926年に初めて『長恨夢』というタイトルで映画になり、その後も舞台では新派として上演され続けました。最後は必ずハッピーエンドです。日本ではマキノ雅弘が1918年、1948年、島耕二が1954年に映画化しています。その島耕二監督作品が第1回東南アジア映画祭(1954)でグランプリを受賞しました。このとき東アジアの映画人が『金色夜叉』を再発見します。こうして60年代に韓国や台湾で『金色夜叉』が大ヒットするのです。



韓国発の古典メロドラマ『春香伝』

韓国には『春香伝(チュニャンジョン)』という大メロドラマがあり、これまで24本ぐらい撮られています。北でも2本撮られていて、それを観るために私は平壤国際映画祭に出かけて行ったりもしました。香港でも広東オペラで『春香伝』をやっていますし、映画化もされました。香港人は韓国原作と知らずに観ています。日本でも高木東六がオペラにしています。

『春香伝』は朝鮮文化が作ったものですが、日本や香港、東アジア全体のメロドラマとして発展しています。大ヒットメロドラマを見ると、その国のナショナリズムのもとに研究するのではなく、越境してどのように発展していったかを見るべきだと思います。『春香伝』の背後には仏教世界、シャーマニズム、儒教があり、それらを共通認識している東アジアの国で受け入れられています。いかに共通するものが多いか。そうやって見ると、今度は違いが面白くなってきます。



アジアのローカル映画に見る類型

映画は大雑把に2種類に分けることができます。世界的に配給され鑑賞される映画がA級。ある社会や言語のなかだけで制作され、そのなかの人々だけが鑑賞するローカル映画がB級です。B級映画を観ないとその国の映画の全体はわかりません。ですがB級映画は世界に配給されたりはしません。私は『春香伝』を観るために2000年はずっと韓国に滞在しました。さらに、日本では知られていないフィルムを探し続けました。『長恨夢』もそのひとつです。あとはタイ、インドネシアでも同じことをしています。私の目標は最終的にアジアの映画のタイポロジー、類型学を作ることです。それがハリウッドとどう違うか。ハリウッドは世界を席卷

し、自分たちの作ったものを最高の価値観だといっているわけです。しかし、それぞれの国にはローカル映画、それぞれの国に根差した映画があります。ハリウッドとローカルのミックス、芸術映画もあります。日本映画は日本人でなくては作れない、理解できないということから離れて考えてみたいと思うのです。

映画には基本的な4つのパターンがあります。アクション、ホラー、コミック、メロドラマ。ハリウッドはこの4つを区別して企画します。ところがタイに行くと、怪奇映画『メー・ナーク・プラカノン』という25本ぐらい繰り返し作られているフィルムがあって、これはホラーだけど、ギャグがあったり、アクションがあったりする。4つが混然としているんです。それぞれを区別するのは西洋的、ハリウッド的な制作方法です。

メロドラマはいつ始まったか？

メロドラマは17世紀のイタリアから始まりました。メロディのあるドラマという意味で、舞台のなかで誰かが歌を歌ったりする。それを見てみんなが笑ったり泣いたりするんです。悲劇に対抗する新しいジャンルとして始まりました。悲劇は必ず超越的な神様がいて、運命を決めてしまう。悲劇を支持していたのは絶対王政、王侯、貴族たちです。それに対し、メロドラマは庶民たちのものです。悲劇とどうちがうかという、神がない。物語の中心にあるのは偶然です。どの国のメロドラマにも出てくるものは、遺産相続、兄弟の争い、身分違いの恋、生き別れになった母と娘の物語などです。メロドラマは途中まで観ると、後の展開が想像できてしまいます。そして確かに想像通りになっていきます。わざとそれを外したりするものもありますが、結局最後は元通り。するとみんな泣いちゃうんです。感極まって涙するのが悦びなんです。私はソウルで『春香伝』を調べた後、平壤で北の『春香伝』を見ました。するとやはり泣かせる場面で泣かせる。私はメロドラマは政治イデオロギーを超えるという信念を持っています。なんとか主義の人だけが泣ける、ということはない。メロドラマは強烈で単純で、だからこそ泣けるんです。

韓流を受け入れた土壌とは

『冬のソナタ』を見ると、男と女が議論するシーンが延々と続いていきます。彼らはキスもしないで愛について議論します。『東京ラブストーリー』というドラマがありますが、このなかでは女性のほうからベッドに誘ったあと、もう議論がありません。愛について語らないのです。日本のドラマがどんどん過激化していったのをよそに、韓国は本家本元のメロドラマに戻って韓流を作ってい

たんです。日本のメロドラマに日本の観客がついていけないなくなったとき、ヨン様がやってきた。

韓流は新派の歴史が80年も90年もあった上で出てきたといえます。今の映画の隆盛のはるか前に、こんな時代があったのです。先輩たちの活躍があり、その前には尾崎紅葉の小説がありました。尾崎紅葉の描いたものが日本で舞台になり韓国でも台湾でも舞台になり、日本で映画化されると韓国でも台湾でも映画化されたということ。彼らが自分をそこに託したということ、東アジアの文化のなかに世界観、人生観、恋愛観の共通のものがあったからこそ、韓国人は『金色夜叉』を受け入れた。だから日本人が『冬のソナタ』を感動を持って受け入れたんです。日本人がどうしてあそこまで韓流ドラマを受け入れたか、韓国人がどうして新派を受け入れたか、これを同じように考えなくてはいけないんです。どっちが先かは関係ありません。積み重ねなんです。アントニオ・グラムシは文化はいきなりできるわけではなく、腐葉土が必要だといっています。たまってたまって積み積もって土地が肥える。韓国ドラマを作り出した腐葉土はなんだろう？ 東アジア全体のなかでの新派に突き当たります。かといって韓国が真似したということではなく、同時に反響し合っているということ。それを認識しないとただのナショナリズム、お国自慢で終わってしまうのです。



よもたいぬひこ 四方田犬彦

東京大学で宗教学、同大学院で比較文学を学ぶ。文学と映画を中心に批評活動を続け、明治学院大学で長らく教鞭を執った。韓国には2度にわたって長期滞在し、1980年代初頭から韓国映画の連続上映を組織。『ソウルの風景』で第50回日本エッセイストクラブ賞受賞。

PROFILE

小学生と先生による日韓ツバメ観察ワークショップ

特定非営利活動法人 バードリサーチ 神山和夫

ツバメは身近な野鳥

春になると東南アジアから渡ってきて、家々の軒先に巣を作るツバメは、日本人にとって最も身近な野鳥のひとつでしょう。ツバメは人通りの多い駅や商店街などに好んで巣を作りますが、これは人間がいることで、カラスなどの天敵が巣に近づきにくくなるからです。このような場所では、フンが落ちないように巣の下に板を付けたり、ツバメの子育てに理解を求めるポスターが貼られているような微笑ましい光景を見かけます。私は野鳥を調べる仕事をしていますが、ツバメは子供でも観察がしやすいため、理科や総合学習の時間にツバメ観察を取り入れた授業をしている小学校は少なくありません。中でも石川県では1972年から、5月に県内すべての小学校でツバメの調査が続けられており、それによってツバメの数の変化がモニタリングされています。私が所属している「バードリサーチ」は全国で野鳥の市民参加型調査を行っている団体で、これまで石川県の小学生によるツバメ調査のホームページ作りや結果集計をサポートしてきました。

実はツバメは韓国でも人家の軒先で子育てをしていて、日本と同じように人々から大切にされている野鳥なのです。慶尚南道で小学生の環境教育に取り組んでいる「環境と生命を守る慶南教師の会」の先生方は、学校の近所に営巣していて観察しやすいツバメに注目し、日本の小学校でのツバメ観察を参考にして、韓国でもツバメ観察を取り入れた学習をスタートさせました。そして慶尚南道の先生方は2012年の夏にツバメ学習の先進地とも言える石川県に視察に来られて、それをきっかけにスタートした交流が発展し、ついに今年の7月28日～8月1日に慶尚南道で「日韓ツバメ観察ワークショップ」が開かれることになりました。



ツバメ教材

ワークショップの開催

石川県各地の小学校から集まった19名の小学生と3名の先生たち、そしてツバメ調査を管轄している石川健民運動推進本部の担当者に私を加えた26名の訪問団は、大阪港から釜山行きのフェリーに乗って韓国へ向かいました。フェリーでは大部屋を借りて、ツバメについての講座をしたり、児童たちが発表会の練習をしながら過ごし、翌日の朝に釜山港に到着すると、バスで昌原市

に向かいました。会場になったウサン(牛山)小学校は郊外にある全校児童40名ほどの小さな学校で、周囲にはレンガ造りの古い戸建て住宅や、漁港、養鶏場などがあり、学校前の通りには数軒おきにツバメの巣が見つかりました。観察発表会では、日本の小学生は壁新聞を使って、自分で観察したツバメについてや、ツバメが巣をかける家の人たちがツバメを大切にしていることなどを紹介しました。韓国の小学生はパワーポイントで、学校周辺のツバメの子育ての様子などを紹介してくれました。そして発表会の後は、両国の小学生が混じった班を作り、周辺のツバメの巣の観察や、お互いの国のカレーライス作り、家庭訪問などをしました。ときどき日本語が分かる大人や大学生が通訳についていたのですが、通訳がないときでも子供どうしは一緒に作業したり遊んだりしていて、言葉が通じなくても尻込みしないで交流する様子には感心させられました。



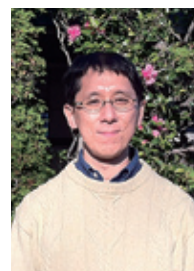
ウサン小学校前の通りでツバメの巣を観察



発表会のようす

ツバメと共生してきた文化

韓国の先生方の話では、この地域のツバメはかなり数が減ってきているそうです。たしかに、釜山から昌原市にかけての市街地は高層化が進んでいて、ツバメが巣を作れそうな家屋は少ししか見かけませんでした。ツバメが生きていくためには、餌の虫が発生する緑地や河川、そして巣をかけられるような人家が必要です。日本も韓国も自然が少なくなり、都市化が進む中で、ツバメは住処を追われつつあるようです。両国には人家でヒナを育てるツバメを大切にしてきた共通の文化があります。今後も交流を続けて、ツバメの保全や環境教育についての知識を共有していきたいと考えています。



特定非営利活動法人
バードリサーチ
こうやまかず お
神山和夫

PROFILE

NPO 法人バードリサーチ 研究員。野鳥の数が分布の調査を市民参加で行っています。ツバメ調査はどなたでも参加していただけますので、ツバメが南から渡ってくる3月になったら、ぜひバードリサーチのホームページ (www.bird-research.jp) をご覧ください。

日韓文化交流基金事業報告

本号では、2013年度第2四半期(2013年7月1日から9月30日まで)の実施事業を紹介します。

1 青少年交流事業

訪日団

団体名	団長	計	男	女	期間	主な訪問先
韓国大学生 (第1団)	金容杓 韓信大学校 国際交流院教授	29	9	20	7/2～7/11	滋賀県大津市 明治学院大学 滋賀大学
韓国大学生 (第2団)	洪允基 慶熙大学校 国際教育院教授	29	14	15	7/2～7/11	愛媛県 立教大学 愛媛大学
韓国大学生 (第3団)	金在俊 木浦大学校教授	22	11	11	9/24～10/3	山形県 青山学院大学 山形大学
韓国大学生 (第4団)	裴文秀 国立国際教育院 行政書記官	20	5	15	9/24～10/3	北海道札幌市 津田塾大学 北海道大学
韓国青年 (第1団)	崔京国 明知大学校 教授	20	7	13	7/30～8/8	広島県安芸太田町 東洋大学 安田女子大学
韓国青年 (第2団)	趙大夏 ソウル女子大学校 教授	19	8	11	7/30～8/8	広島県安芸太田町 目白大学 安田女子大学
韓国青年 (第3団)	金生培 順天江南女子高校 教諭	51	21	30	7/30～8/8	広島県安芸太田町 広島県立加計高校



韓国青年訪日団(講義)



韓国青年訪日団(高校生浴衣体験)



韓国大学生第3団(オリエンタルカーペット訪問)

訪韓団

団体名	団長	計 *1	男 *2	女 *2	期間	主な訪問先
福島県いわき市 中学生	佐川秀雄 いわき市教育委員会学校教育推進室長	50	25	20	9/8～9/14	東馬中学校 ソウル日本人学校
日本大学生	下地富雄 外務省領事局海外邦人安全課課長補佐	30	10	20	9/9～9/18	外交部 日中韓協力事務局 韓国外国語大学校

*1引率含む *2生徒のみ

2 賛助会員

2013年7月1日～9月30日の期間に個人会員20名の方に賛助会員制度にご加入いただき、22万円の会費収入となりました。皆さまのご厚意に深く感謝申し上げます(五十音順、敬称略)。

個人

秋月望	石丸重尚	林在圭	梶谷崇	木畑洋一
黒柳慶子	小泉勇治郎	齋木崇人	櫻井浩	白川豊
田中正敬	崔寧桓	中江新(3)	中塚明	波田野節子
浜之上幸	林和彦	藤原祥二	三谷太一郎	和田とも美

日韓文化交流基金創立 30 周年記念事業

当基金は創立30周年を記念して、下記の事業を予定しております。
詳細は次号でご紹介しますので、ぜひご覧ください。

日韓文化交流シリーズ
公演
「えん〜縁・演・宴〜」
(於 韓国文化院ハンマダンホール)

日韓文化交流シリーズ
朗読会
「ことばの調べにのせて」
(於 県立神奈川近代文学館)

作文コンクール

「日韓文化交流基金
30年史」発行

お手紙紹介

福島県いわき市中学生からの手紙
～笑顔は復興の証～

JENESYS2.0 福島県いわき市中学生訪韓研修団に参加した、いわき生徒会長サミット議長の根本直哉さんから素晴らしいお手紙をいただきました。スペースの都合上、一部抜粋してご紹介いたします。

先日は、JENESYS2.0 福島県いわき市中学生訪韓研修団として、私たちと同世代の韓国の中学生との交流や伝統文化・社会に接する機会を設けていただきありがとうございました。

見て触れるもの全てが新鮮だった研修日程の中で、貴重な数多くの経験をさせていただいたことで、様々な感想を持ち、多くのことを学ぶことが出来ました。充実した7日間を終えた今は、いわき生徒会長サミットメンバー一人一人が学んだことを学校に持ち帰り、多くの人々に伝えていくところです。(中略)

今回の訪韓において、私たちの大きな目的の一つが「日本・福島・いわきの今と私たちの姿」をプレゼンテーションで伝えるというものでした。

ソウル日本人学校を訪れた際は、短い時間の中でしたがすぐに打ち解けあい、住む場所は異なりながらも頑張っている日本の友達に向けて、同じように頑張っている私たちの姿と震災の経験を「繋ぐ記憶」というコンセプトで伝えました。私たちの思いを心から受け止めてくれて、復興について共に考えることができ、たくさんの勇気をもらいました。

また、東馬中学校での交流も大変思い出に残るものでした。実際に韓国の中学校で韓国の中学生と、授業を受けたり、給食を食べたり、話したり、笑ったり…と一日過ごす中で、かけがえない時間を過ごすことができました。思うように言葉が通じない中でも、少しの韓国語や英語、身振り手振りを駆使してコミュニケーションを取り、仲良くなれました。ここでは、「創る希望」と

いうコンセプトのプレゼンテーションを行い、震災から学んだことを生かして私たちの考える「笑顔の世界の架け橋に — 笑顔は復興の証 —」ということや支援して下さった韓国への感謝の気持ちも日本を代表して改めて伝えることができました。今でも、パートナーとはメールなどを通じて交友が続いています。

それぞれ、訪韓の約1か月前から準備して練習を重ね、本番に英語と韓国語で発表できたことは、私たちの大きな自信にもなりました。まさに大成功で訪韓を終えることが出来たと思います。この他にも、韓国国際教育院や日本大使館といった普通訪れることの出来ない場所への貴重な訪問も企画していただき、サミットメンバー一人一人が国際社会に関心を抱き、自分に出来る事を改めて考えました。

今日の国際社会はグローバル化が進んでいます。その一方で国際間での解決すべき問題も数多くあるのが現状です。例えば、私たちが今回の訪韓で訪れた烏頭山統一展望台では、韓国と北朝鮮の今、近くて遠い国を目の当たりにして歴史の重み、外交の難しさを感じました。日本を例にとっても、韓国とは領土問題などで問題が絶えません。特に隣国である韓国とは良い交友関係や相互理解の信頼関係を築いて、共に国際社会をリードしていかなくてはならない必要性も感じました。私たちもこの訪韓を通して韓国に対するイメージが良い方向に変わったのは確かです。

私たちはあと20年、30年後のいわき、日本、そして世界を様々な分野でリーダーとして担っていくことを目標に日々活動をしています。そのために必要な事の多くを今回の訪韓を通して得ることができました。これからは、この経験を生かしてそれぞれが夢に向かって努力していきたいと思っています。



笑顔の給食体験(東馬中学校)



ヘア生徒から楽器の手ほどきを受ける(東馬中学校)